

所 信 表 明

平成 2 7 年 1 0 月 6 日

長久手市長 吉田一平

【はじめに】

本日、ここに平成27年第3回長久手市議会定例会の開会にあたりまして、市長2期目就任のごあいさつを申し上げるとともに、今後の市政運営につきまして、初心に立ち返り、私の基本的な考え方を述べさせていただきます。

最初に、去る8月30日の市長選挙におきまして、市民の皆様をはじめ、各方面からのご推薦と力強いご支援を賜り、再び、長久手市政の運営に当たることになりましたことは、極めて光栄であると同時に、皆様の大きな期待に応えるため、私の果たすべき職責の重さ、大きさを改めて痛感しております。

市政の発展に精一杯尽くしてまいりますので、何卒、皆様のご支援、ご鞭撻を賜りますようお願いいたします。

【人口減少社会への対応】

これからの市政の第一の課題は、人口減少社会への対応です。

私の1期目がスタートした平成23年（2011年）は、人口減少社会元年といわれています。また、同年3月には東日本大震災が発生し、それらを契機として、人々は地域社会の中で「絆」や「つながり」の大切さを改めて認識し、日本人の価値観が大きく変わったとも言われています。

日本中が、山の頂上ただ一点を目指して、一目散にかけ上っていく時代は終わり、360度に広がる裾野の、どの方向に下りていくのが正解か分からない山を降りていく時代へと変わりました。社会の仕組み、価値観が大きく変わりつつあるのです。

さらに、今後、日本の人口が減り続け、2050年には、今よりおよそ3,000万人減ると予測されています。これは、日本国の歴史上、前例のないことであり、行政はもとより、社会全体が、今までの前例踏襲主義、目に見えるものを評価するモノサシだけでは、立ち行かなくなることは想像に難くありません。これからの人口減少社会では、社会の仕組みはもちろん、物事を評価するモノサシが今までとは変わり、目に見えないものも含めて評価する時代が変わっていくと私は確信しています。

戦後の、山の頂上を目指す時代は、企業など仕事場の価値観でした。仕事の場合は、能力に価値があり、常に効率や結果が求められ、完成、解決を目指す社会です。

一方で、これからの人口減少社会においては、さきほども申し上げたように、物事を評価するモノサシが今とは変わり、目に見えないものを評価する全く新しい時代になるのです。

新しい時代は、家庭や地域など暮らしの場の価値観であり、一人ひとりの存在そのものが大切で、無駄なことも受入れ、いつも未完成的な社会です。

私たちは、子どもの頃は、誰もが暮らしの場の価値観で過ごしていたのに、訓練して仕事場の価値観を身に付けます。

家庭や地域、人生において、仕事場と同じような完成、解決は必要でしょうか。

私たちは、地域において、仕事場の価値観のままで暮らしてはいないでしょうか。

私たちは、ともすると安らぎの場であるべき、家庭においても、子どもたちを仕事場の価値観で評価してはいないでしょうか。

家庭や地域までが、能力に価値を見出し、常に効率や結果を追い求め、完成することを目的にした仕事場の価値観になってしまったことが、いじめや引きこもり、自殺といった現在の「ひずみ」を生み出しているように感じられてなりません。

市役所職員一人ひとりが、自分自身の仕事と捉えるときは、もちろん、役所の仕事としてしっかりとやるべきことは、きちんと行う必要があります。しかし、私たち公務員の本来の仕事は、家庭や地域といった人々の暮らしを対象にした仕事です。市民のみなさんと一緒に話し合ったり、一緒に何かをしたりするときには、改めて、その場のあり方を認識してほしいと思います。

2050年には、本市においても、高齢者の数は、現在の倍近い約2万人になり、高齢化率は3割を超えます。今から、そうした認識を持つ必要があるのです。

今、マスコミで盛んに、「夫源病」や「主人在宅ストレス症候群」という言葉が報じられています。退職後も仕事場の価値観から抜け出せない夫が、一日中、家にいると、妻の体調が悪くなるというものだそうですが、それでは困ります。そうならないために、これまで日本の成長を支えてこられた世代の方々が、退職後も地域などで「必要とされている」と感じる事ができるまちにしていきたいと考えています。

地域において、女性、男性にかかわらず、みなさんがいきいきと活躍する場があることは、健康寿命を延ばし、実質的な高齢化率をぐんと減らすことができます。今後は、そのための施策を推進することが重要と考えています。

【市民主体のまちづくりの推進】

第二点は、市民主体のまちづくりの推進です。

私は、4年前の選挙に当選して役所に入るまで、総合計画というものを全く知りませんでした。

例えば、緑地が削られることを止められない理由は、総合計画やその下位計画において、地域の土地利用が定められている一方で、緑地の明確な保全方法が示されていないからだを知りました。私たち市民の生活に大きく関わることでありながら、市民が全くその計画や事業について知らない。これは、大変大きな問題です。

市政は、市民のみなさんのものです。市民のみなさんが主役です。だからこそ、私は、市民のみなさんに、自分たちの生活に関わることをもっと知ってほしい、もっと計画づくりにも参加してほしいと念願しています。

これまでの行政は、広く周知すること、市民のみなさんに集まっていたかくこと、話し合うこと、異なる意見をまとめることが非常に苦手でした。

私は1期目の4年間では、これを課題とし、市民のみなさんに参加を呼びかけ、話し合いの場を設け、数多くのワークショップを重ね、異なる意見をまとめる訓練を重ねてきました。市民のみなさんと市役所職員が手を携えて、市民主体のまちづくりへ向けた、言ってみれば、土壌づくりに取組み、着実

に前進しつつあると感じています。

これからの4年間は、引き続きこうした努力を重ね、市民主体の話し合い、計画づくり、まちづくりが出来れば、それこそが、今、我が国の地方自治体の最大の課題ともいべき地方創生の切り札に成り得ると考えています。

今後、自治体を図るモノサシは、こうした市民主体で計画づくりや事業推進ができるか否かで評価されるようになっていくものと考えます。

加えて、地域づくりやまちづくりのきめ細やかな計画や事業は、市全体で画一的に捉えることは困難です。市民主体のまちづくりにおいては、小学校区など小さな単位で行うことが望ましいと考えています。特に、本市としても避けては通れない自然災害、高齢化に伴う認知症や孤立死の問題、子どもの虐待、いじめ等については、地域で支え、地域の実情を踏まえて、地域で解決していくことが求められる時代になりつつあると考えています。

地域で課題を解決していくための第一歩は、市民同士、隣近所同士のあいさつです。

「まちづくり まずは笑顔で こんにちは」

簡単なようですが、その簡単なことが、今、ほとんどできていないと感じます。確かに、知らない人へのあいさつは、勇気が必要です。でも、そこは小さな勇気を持って、長久手市に暮らす人同士が、あいさつを交わしてほしいと思います。

あいさつによって、顔の見える関係を築くことこそが、「あんしん／助けがなかったら生きていけない人は全力で守る」の第一歩なのです。

私たち市役所の仕事は、人と人との関係の上に成り立っています。あいさつ、声掛けがすべての基本です。まず、4年前の就任当初から取り組んでいるあいさつの励行を、市役所職員にさらに徹底させます。市議会議員の皆様、市民の皆様におかれましても、ぜひ、ご協力をお願いしたいと思います。

【自然との共生】

第三点は、自然との共生です。

本市は、昭和40年代後半から組合施行の区画整理によって発展を続けてきました。組合施行の区画整理においては、市民が自分の土地の一部を提供し、その土地を売って事業費を作ったり、その土地を使って道路や公園を作ったりしてきました。まさに、市民の力、市民の協力でまちづくりを行ってきたのです。

都市基盤が整った一方で、都市化が進み、年々、ふるさとの風景は変わって来ました。だからこそ、私はもう一度、みどり豊かな長久手の原風景を子どもたちに残していきたいと考えています。

ヨーロッパにおいては、子ども時代に自然に触れる機会が少ないと、「自然欠乏症候群」といって集中力が無かったり、我慢ができない子どもになったりするとも言われており、自然をととても大切にしています。

私は子どもの頃、たんぽぽの綿毛の美しさに宇宙を感じました。長久手に暮らす子どもたちが、今よりも、もっと多く自然に触れ、目を向けることができるような環境を作っていきたいと考えています。

「自然の叡智」「自然との共生」をテーマにした愛知万博から10年が経ちました。今一度、「自然と共に生きる」とはどういうことか考えてみましょう。

みどりが増えれば、当然、落ち葉や虫の問題も発生するでしょう。自然と共生することは、煩わしいことも受け入れるということです。本当の意味の「自然と共生する長久手」を目指して努力していきたいと考えています。

【3つの基本理念の更なる推進】

私は、今回の選挙においても、前回と同じ、市政に関する3つの基本理念を掲げさせていただきました。

3つの基本理念とは、これまでも機会があるごとに申し上げていますが、
つながり 「一人ひとりに役割と居場所のあるまち」

あんしん 「助けがなかったら生きていけない人は全力で守る」

みどり 「ふるさと（生命ある空間）の風景を子どもたちに」

の3つです。

私は、この3つをすべての政策の基本に据えています。そして、この3つの基本理念は、一つずつ独立しているのではなく、重なり合い、連なっています。

先ほど、これからの市政の課題について、述べてまいりましたが、私たちがこれから直面する人口減少社会の地域づくり、まちづくりにおいては、この3つ「つながり」「あんしん」「みどり」こそが、その要として、必ず求められるものだと確信しています。

3つの基本理念を政策の基本にする地域づくり、まちづくりに取り組むことにより、これからの目に見えないものが評価される時代になっても、本市は、これまでと同じ、高い評価を得られるまちであり続けていくことが出来ると確信しています。

【結び】

50年ほど前までは、決して恵まれていたと言えない条件の中で、先人たちが自分たちの力でまちづくりに取り組み、現在のこのように素晴らしい長久手市を築き上げてくださいました。

近年、私たちの長久手市は、東洋経済新報社の「住みよさランキング」において4年連続トップ10入りするなど、その住環境の良さが高い評価を得ています。また、2014年に日本経済新聞社が発表した「子育てのしやすいまちランキング」では、全国1位という評価をいただきました。

これらのランキングは、下水道整備や都市公園の面積、医師の数など、統計数字として目に見えるものをベースに評価された結果ではありますが、何はともあれ、都市としての高評価をいただけることは、これまで都市基盤整備に力を注いで来られた先人の方々の長年にわたる努力のおかげであり、その礎の上に今日の長久手市があることを忘れてはなりません。

しかし、これからの目に見えないものを評価する時代に対応していくことを考えた場合、市役所職員だけで、これまでの行政手法、これまでの価値観

から抜け出すことは難しいと思います。そこに市民の力が加わることで、これまでの手法や古い価値観からはみ出したり、にじみ出したりすることができ、そこから新しい手法や価値観が生まれると考えています。

新しい価値観や変化を受入れ、対応できるようにするためには、何より多くの市民のみなさんの力が不可欠であり、多様な人や考え方を受け入れる柔軟な仕組みを作っていくことが必要です。

これまでの完成された仕組みで動く市役所は、変わらなければなりません。これからは、市民と行政が「協働する」のではなく、市民が主体となり、そこに行政が事務局的な役割を果たす新しい仕組みが、まちづくり、地域づくりの鍵となり、その方向を目指して努力することが求められていくのです。

これまでの山の頂上への到達を競い合う時代の、行政にお任せのまちづくりにおいては、行政職員や専門家が主体となり、効率的に当てはめる仕事が主流でした。そのための手段として、コンサルタント会社などへ計画づくりを委託するなど、例えるならば畑に化学肥料を入れ、促成栽培をし、早く成果が目に見える、画一的な方法が多かったように思います。市民のみなさんの参加も、仕事や役職の関わりによる参加も多かったように見受けられました。

これからの人口減少時代における、市民主体で地域の問題解決を目指すまちづくりにおいては、手間暇がかかり、失敗や遠回りもあるかもしれませんが、一人ひとりのことを考え、やりがいや生きがいがあり、そこに物語が生まれ、その一つひとつの取組みがまちの魅力になっていくと私は確信しています。

人を育て、まちを育てるには時間がかかります。

それでも、未来を切り拓いていくために、試行錯誤しながらも、チャレンジしていかなければならないと、私は信じています。

今の時代に生きる私たちがやるべきことは、未来の子どもたちが、長久手で暮らすことに誇りを持ち、幸せが実感できるまちづくりです。

誰もが、かけがえのない存在として、役割と居場所のあるまちの実現に向けてチャレンジしたいと考えています。みんなで手を携え、その第一歩を踏み出しましょう。

議員の皆様をはじめ、市民の皆様方におかれましては、私の市政に対する熱い思いをお汲み取りいただき、より一層のご指導、ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます、2期目就任にあたりましての所信といたします。

どうぞよろしく願いいたします。

平成27年10月6日

長久手市長 吉田一平